

スピリチュアリズム入門

第四章 靈界（本格的な靈の世界）

（四）類魂（グループ・ソウル）としての歩み

(168)

靈的家族の形成

靈界入りした靈は、同じ成長レベルの他の靈たち（同じ界層にいる靈たち）と、共同社会をつくるようになります。靈界に入ると“類は類をもって集まる”の譬えのごとく、自動的に惹き合っ

て一体となり、靈的グループを形成するようになります。

靈界でこのようにしてつくられたグループは、まさに「靈的家族」というべきもので、きわめて親近性の高い関係を保つようになります。メンバーの靈格（靈的成長度）は言うまでもなく、情緒や嗜好に至るまで類似性・共通性を持っています。これほどの親密さは、地上には決して存在しません。お互いの親密度は、地上時代の親友関係などの比ではなく、どのような夫婦や家族の結びつきも遥かに及びません。まさしくここには、完璧な親和性を持った理想的な人間関係が存在します。

もちろんメンバーの間に、ウソや裏切り、本音とタテマエの区別というようなものは、ひとかけらもありません。地上のような言葉の壁は一切存在せず、お互いが心の中で考えている内容が手

に取るように理解できます。自分の思うことは言葉を介さなくても完全に相手に伝わり

ます。初めて靈的家族の仲間入りをした新

しい靈は——「これほどまでに自分と似通った者たちがいるのか！」「と驚きます。「これほどまでに自分と一心同体の世界があるのか、これほどまでに心が通じ合う者たちがいるのか！」と感嘆するのです。

靈的家族は、さまざまな人種・民族から成り立っています。メンバーの中には地上時代に黄色人だった者もいれば白人だった者、黒人だった者もいます。また地上生活を過ごした時期も一人ひとり異なり、地上時代の職業もさまざまです。ある者はインド人の僧侶であったり、ある者はアメリカ人の技師であったり、イタリア人の画家であったり、中国人の農民であったりします。

靈的家族においては、そうした違いは全く問題にはなりません。「魂の兄弟」という意識以外、何も存在しません。ここには、地上ではいまだに成し遂げられていない完璧な平等社会が実在しています。地上ではなかなか純粋な平等意識を持つことができないため、完全な平等と公平は、常に理想として残されたままになっていました。しかし靈界では、その理想が完璧な形で実現しているのです。

「類魂」という共有意識・共通意識の発生

この靈的グループでは、さらに驚くようなことが起こります。そこにいるメンバーの心が文字どおり一つとなってしまうのです。こうしたことは地上時代には想像することさえできませんでした。地上では、自分は自分、自分の考えは自分のもの、自分の心は自分のもの、というのが常識でした。自分は自分、他人は他人という区別は、地上では当たり前のことでした。時には仲のよい夫婦

や男女が“あなたと私は一心同体”と言うことがあっても、それは単なる比喩であって、言葉どおりそれが実現するとは考えられていませんでした。

ところが霊界の霊的家族の中に入ると、その地上の大常識が覆されることになります。霊的家族の中では、「あなたと私は同一の人間」というような奇跡が発生するようになります。「自分の心」が「他人の心」と一つになり、相手そのものになってしまふのです。「心の融合化・心の一体化」という、地上では絶対に考えられなかったような出来事が現実のものとなるのです。

霊界の霊的家族の中では、それぞれの心が融合化・一体化して「大きな意識体（心）」をつくり上げるようになります。メンバー全員の意識（心）が一つに融合して「大きな共有意識体・大きな共通意識体」を形成するようになるのです。これを「類魂（グループ・ソウル）」と言います。地上では、自分の意識が他人の意識と融合して一つになるというようなことは決してありませんが、霊界ではそうした奇跡のようなことが実際に起きるのです。霊界の低い界層では20人くらいの霊が集まって類魂を形成し、高い界層ではその数がずっと多くなつて、何百、何千という霊たちが一つの類魂（共有意識体）を形成するようになります。広大な霊界には、こうした類魂が何億、何十億と存在しているのです。

類魂の中では、「他人の心」が私の心と一つになって「私の心」となります。何十人もメンバーの心が「私の心」となります。「私の心は皆の心、皆の心は私の心」というような状態になるのです。その結果、「私の心」はそれ以前では考えられなかったような「大きな心」となり、「大きな意識体の一部」となるのです。

他の霊の地上体験を共有

全員の心が融合して一つとなる「類魂」の中にあつては、“自分と他人の区別はどうでもいい”といった状態にまで至ります。また実際に、自分と他人の区別さえつかなくなるようなこともあります。こうした場合、類魂仲間の他の霊を指して“私”と言ってもよいことになります。反対に他の霊が、私の名前を用いて“自分”と言っても、間違いではないことになります。

一方、類魂の中では、他の霊の地上人生はその霊のものであると同時に“私”の地上人生にもなります。肉体的には“私”はそれを体験しなかったけれども、「私は間違いなくその地上人生を歩んだ」と言うことができるようになります。地上時代の“私”は東洋人であっても、「私は西洋人でもある」と言うことができるようになるのです。

類魂という共有意識体の中では、他の霊の体験と知識はすべて“私”のものとなります。他の霊の感情も“私”のものとなります。こうなると自分の経験・知識・意識は一気にふくらみ、突如「大きな私」になるのです。自分自身でも驚くような「大きな意識（心）」を持つようになるのです。霊たちは類魂の一員になって初めて、全体としての内面的協調の生活が、いかに素晴らしく、いかに美しいか、しみじみと実感することになります。ここにおいて地上生活では免れえなかった“自己中心性”という地上的傾向から完全に解放されるようになるのです。

第五章 永遠の靈的成長の道

(一) 地上人生の目的 —— 「魂を成長させること」

地上人生の目的とは

一人ひとりの人間が至った靈的成長レベルのことを「靈格」と言いますが、その靈格が死後の靈界での界層を決定することになります。靈の世界での生活が永遠であるのに対し、地上人生はほんのわずかな時間にすぎません。この事実は地上人生の目的が——「魂を成長させて永遠の死後の世界に備えること」であることを示しています。地上における束の間の人生によって“永遠の世界”での幸福が決定されるとするなら、地上生活を送る私たちは、何よりも自らの靈的成長を人生の第一目標としなければなりません。人類にとっての重大な哲学のテーマの一つが「人間は何のために生きているのか？」というものですが、その答えは「魂の成長・靈的成長」という一言で言い尽くされてしまうのです。

しかし現在の地球上には、「自分の心(魂)を成長させることが、自分の人生の目的である」と断言する人はめったにいません。心の大切さを強調する人はいますが、靈的成長が地上人生の目的のすべてであると主張する人はいません。一方、靈界では、一人ひとりの靈が自分の靈的成長を人生の最大の目的とし、それを求めて歩み続けています。靈界人が靈的成長にかける熱意は、地上人がお金に対して抱く執着など足元にも及びません。それほど靈界では、靈的成長がすべての人々の願望となり、人生の目的そのもの

のとなっているのです。この点で靈界人と地上人では、天と地ほどの違いがあります。

靈的成長を効果的に達成する地上世界

神は、人間が靈的成長をなすにふさわしい場所として地上世界を造られ、そこで生きていくための道具として肉体を与えられました。地上が靈界と比べてきわめて粗雑で、何をするにしても困難がともなう場所であるのは、人間の靈的成長を効果的に促す環境として、神がそのように計画されたからなのです。

そうした神の配慮によって、肉体を持って生きる地上生活の間に、人間は短期間で永遠の世界に対する準備をすることができるようになっています。靈界で生活するための靈的土台をつくることが、地上人生で可能となっているのです。この点からも地上人生の目的が——「靈界行きに備えて靈的成長をなすこと」であることが明らかになります。

大切な地上人生を無駄にする多くの地上人

地上人生は靈界における永遠の生活を決定するという、きわめて重要な意味を持っています。しかし残念なことに大半の地上人は、その大切な地上人生を無意味に過ごしています。せっかく地上人生というチャンスを与えられながらも、肝心な靈的成長を促すような歩みをせず、どうでもいいような肉体を満足させるためだけの生活を送っています。わざわざ地上に生を享けたにもかかわらず、それをすべて無駄にするような生き方をしているのです。

ほとんどの地上人が、神が与えてくれた最高の宝を自ら捨て去っています。そして死んで霊界に行って初めて、自分にとって最も価値のある貴重な宝を捨て去ってきたことに気がつき、後悔するようになるのです。

このような地上人の「霊的事実」に対する無知は、地上人をより高い世界へ導くことを使命とする高級霊にとって、大きな嘆きとなり悩みとなっています。そうした霊界人の思いを、シルバーバーチは次のように述べています。

『残念ながら大部分の地上の人間においては、霊があまりにも奥に押し込められ芽を出す機会がなく、潜在的な状態のまま放置されています。物質にすっかり浸りきり、霊が今にも消えそうな小さな炎でしかない人が大半です。大多数の人が身につけるべきものをロクに身につけようとせず、地上を素通りしております。』

ですからイザこちらの世界にきたときには何の備えもできていないか、さもなくば、一から学び直さなければならぬほど、誤った思想・信仰によってぎゅうぎゅう詰めになっています。本来そうしたものは地上の方がはるかに学びやすく、その方が自然なのです。

霊界へ送り込まれてくる人間の中にも、もしも地上で霊的知識を身につけていたら、こうまでひどくならなかったであろうに、と思われる廃残者・墮落者・霊的生活への備えがまるできていない者が、あまりにも多すぎるのです。無知と恐怖と迷信と偏見に満ちた者ばかりなのです。』